

古文字學研究文獻提要

“裘錫圭の甲骨文字に關する論考より”

今號は中國の文字學者裘錫圭の論考のうち、甲骨文字に關するものを紹介する。これらの論考で提示された釋讀は、いずれも現在の中國古文字學において定説に近い扱いとなっている。なお、いずれの論考も『裘錫圭學術文集一 甲骨文卷』（復旦大學出版社、二〇一二年）収録のものを定本とした。

「釋 𠄎」

附論「釋 𠄎」

本論文は『古文字研究』第三輯（中華書局、一九八〇年）に初めて掲載されたものである。その後、『裘錫圭自選集』（河南教育出版社、一九九四年）などにも収録された。

なお、原著が約四十年前と古いため、その後の發掘・研究と若干の矛盾が生じており、この點については末尾で述べる。

本論文は『甲骨文編』で「𠄎」と釋された甲骨文字の「𠄎」や「𠄎」などの字形について、武器の柄を意味する「𠄎」の初文で「𠄎」にあたることを論じる。また附論の「釋 𠄎」では、甲骨文字の「𠄎」

や「𠄎」などの字形が「𠄎」であることを述べる。

まず字音について、小篆では、「𠄎」に「八」を加えた形が「𠄎」の字形であるため、『說文解字』（八部）は必を「𠄎聲」とするものの、𠄎と必の上古音は、韻母は同部ではなく、また聲母も遠く離れている（筆者注、𠄎は余紐職部、必は幫紐質部と推定されており、例えば李珍華・周長楫『漢字古今音表』（中華書局、修訂本一九九九年）は、それぞれの上古音を[kiek]と[piet]と推定する）。

また字形について、西周金文では𠄎（𠄎）と必（𠄎）の形が違う。これらのことから、裘氏は𠄎・必の二字を別個のものとし、『說文解字』が小篆の形から字源を解釋することを批判する。

字形については、甲骨文字の第一期（最初期）に見える𠄎（𠄎）と「𠄎」、および第五期（最末期）に見える𠄎（𠄎）と「𠄎」が近いことも、これらが𠄎（武器）の柄を表す𠄎（必）字である論據として擧げている。

そのほか、裘氏が論據として擧げる關連字は六種の甲骨文字である。その一は「𠄎」などであり、『甲骨文編』では未釋字とされていたこの文字を、「𠄎」として『說文解字』は皿部に記載。「𠄎」については、

金文の「宀」に近い形を用いた「宀」などの異體があり、「宀」と「宀」の通用が確認できる。また、「宀」を用いた甲骨文字に「宀」があり、「宀」と「宀」の上古音が近いことから、裘氏はこれを「宀」と釋す（筆者注、敝は上古音が並紐月部または並紐歌部と推定されており、例えば『漢字古今音表』は「宀」と復元する）。

その二は「宀」である。西周金文では「宀」の形になっており、裘氏はこれらを「宀」と釋す（『說文解字』口部に記載）。その三は「宀」などであり、同じく「宀」と釋す（『說文解字』宀部に記載）。その四は「宀」などであり、同じく「宀」と釋す（『說文解字』食部に記載）。その五は「宀」であり、同じく「宀」と釋す（『說文解字』馬部に記載）。いずれも「宀」またはそれに近い形が最終的に小篆で「宀」になったと推定している。

その六は「宀」などである。この文字については諸説あり、「宀」や「宀」などの説があるが、裘氏は「宀」と釋す（『說文解字』には記載がない）。また異體に「宀」があり、「宀」の部分に裘氏は「宀」の異體と見なす。また類似形の「宀」や「宀」なども同字と推定する。また、以上の六種のほか、さらに關連して甲骨文字の「宀」や金文の「宀」を挙げている。「宀」については、殷の先王名で「宀十」として見えており、『史記』殷本紀の「河亶甲」にあたる。一般に「宀」（王名としては「宀甲」とされているが、「宀」が使われていることから、裘氏は「宀」であることを否定し、「宀」の初文とする。また、「宀」については、やはり「宀」に近い形が右辺に使われており、水（宀）と合わせて「宀」と釋している。また金文では「宀子」として見えて

おり、『詩』衛風・淇奥に「有匪君子」があり、韓詩では「有宀君子」に作ることから、「宀子」も「宀子」の意味であるとされる。ただし後者については、『裘錫圭學術文集』の編者も述べるとおり、あまりにも強引な解釋であり、「沈子」と見るのが妥當であろう。

続いて、本論文は、それぞれの甲骨文字における用法を列記している。まず「宀（宀）」については「宀不其以宀」として見えており、原義である武器の秘とする。

「宀（宀）」については、「子宀」などとして見えており、人名である。「宀（宀）」については、「狩」や「呼」などに続いて使われており、この場合は地名や人名である。また、「歳其」（歳は祭祀名）に續く例などもあり、この場合は『爾雅』が「謚、靜なり」とする「謚」であり、「安寧」の意味とする。

「宀（宀）」については、動詞として使われており、國名・族名を對象としている。裘氏は『說文解字』（宀部）が「宀、安なり」とするのを採る。

「宀」については、動詞として使われる例があり、裘氏は「宀（宀）」と同意とする。また、「宀」については、地名が對象となる場合が多いことから「宀」の意味で使われているとし、『說文解字』比部の「宀、慎なり」を採り、鎮撫の意味とする。また、「宀」と「田」の違いについても考察しているが、これは既に一九六三年に松丸道雄「殷墟卜辭中の田獵地について」（『東洋文化研究所紀要』三一）によって分析された内容の一部に近い。

また、「宀」や「宀」は祭祀に關連して記されることがあり、この

場合には、裘氏は「必」に字音が近い「比」（「およぶ」の意味）と見なす（筆者注、比は上古音が幫紐脂部および並紐脂部の二音と推定されており、例えば『漢字古今音表』は [pəi] [biəi] と復元する。前者は必と入聲・陰聲の押韻関係になる）。

以上が本論であるが、附論の「釋 弋」は甲骨文字の「𠄎」や「𠄏」などの字形を分析している。

これらの字形は、下部が尖った様子を表しており、「𠄎」とは別字で、「𠄎」の初文の「弋」であるとした。また、この文字は、「督」と釋される「𠄎」（略體は「𠄎」）に使われており、金文の「弋（弋）」に字形が近い。そこで、裘氏は弋の原型と見なし、また𠄎・弋を同源字とする。

甲骨文字の「弋（𠄎など）」については、動詞のほか人名や國名として使われている。そのため、裘氏は「代」の字義と見なしている。そのほか、甲骨文字には「𠄎」を使った文字に「𠄎（𠄎）」などがある。字形について裘説をまとめると、必の變化は「𠄎→𠄎→𠄎→𠄎→必」となり、弋の變化は「𠄎→𠄎→𠄎→𠄎」となる。

以下、筆者注である。二〇〇三年に公刊された『殷墟花園莊東地甲骨』（雲南人民出版社）には、一例だけであるが、「必」にあたる字形（𠄎）が発見された（第二三五片）。裘氏が「弋」とした字形（𠄎）に、後代の必と同じく小點が加えられている。また、前掲の𠄎（𠄎）についても、弋（𠄎）の部分に小點が附加されている。したがって、弋・必を全くの別源字とするのは無理があるだろう。

また、「𠄎」には小臣弋（𠄎）と呼ばれる（『懷特氏等收藏甲骨

文集』（皇家安大略博物館、一九七九年）第九六一片）など、人名・地名の用例もある。「𠄎」などが動詞・人名・地名として使われ、「𠄎」にも動詞・人名・地名の用法があるのであるから、字義の面でも両者を積極的に區別することが難しい。

さらに、東周代の印章でも、弋（𠄎）と必（𠄎）に類似の字形が見られる（それぞれ『古璽彙編』（文物出版社、一九八一年）三二二四・五二二一）。小篆の弋（𠄎）・必（𠄎）を含め、両者は長期間にわたり互いに影響を与えながら字形を變化させてきたと見るべきであろう。

そのほか、裘氏は殷の王名を「𠄎甲」ではないとしたが、「𠄎（𠄎・𠄎）」を使った「𠄎十・𠄎十」の用例も見られ（例えば『甲骨文合集補編』（語文出版社、一九九九年）第一〇六五九片・同一〇六二六片綴合）、いずれが原型かは明らかではない。また「𠄎」についても「𠄎（𠄎）」を使った「𠄎」が見られる（例えば『甲骨文合集補編』第一二一〇五片）。

（落合淳思）

「釋 𠄎」

『裘錫圭自選集』の末尾跋文によれば、本論は『古文字學論集』初編（香港中文大學、一九八三年）に収録された同名論文を、首屆國際中國古文字學研討會發表時に改稿したものである。その後裘氏の著書である『古文字論集』・『裘錫圭自選集』にも再録されている。具體的な改稿部分は、本文中の「『有害』・『亡害』も古代の成語である」以

下の一段であるとのこと。

本論の主題となるのは、甲骨文に見られる「𧈧」(『甲骨文合集』224、以下「合」と略)・「𧈩」(合3419)などの形で書かれる字の隸定並びに字釋に対する新説である(以下、裘氏は當該字を「𧈩」と隸定する)。本論は、「𧈩」字に対する従来の隸定を再検討し、ついで當該字が「傷害」の義を持つ「害」の本字である(「害」の「傷害」の義は假借である)とするのが、議論の中心となる。

まず、裘氏は甲骨文における「𧈩」の用法を整理し、「𧈩(崇)」「𧈩(憂)」などの字と類似したものとされてきたことを指摘する。

次に裘氏は、「𧈩」について従来の字説を整理する。

まずは羅振玉の「它」ではないかとする説を採りあげる。

羅振玉(『増訂殷虛書契考釋』中34)は『說文解字』(卷十三之下)に「它・虫也。上古艸居患它。故相問無它乎。」及び「蛇・它或從虫。」を引き、卜辭に見える止(足)の下部に它が付く(或いはその字形に加えて彳が横に付く)字は、おそらくは「它」字のことであり、無事故の通稱であったとする。また羅氏は「它」と「虫」について、これらもほぼ同一の文字であり、後の人が誤って二字に分ける、あるいは一字に合體して「蛇」としたとし、許慎もまたこのような誤りを免れ得なかつたとする。

裘氏はこの羅説に対し、斯界に影響があったことを認める一方、その問題点を指摘する。

まず、金文の「虫」の字形「𧈩」(「魚鼎」)、『殷周金文集成』980: 戦國晚期、以下「集成」と略)・「𧈩」(「甲虫爵」集成8000: 商代晚

期或西周早期)と「它」の字形「𧈩」(「阜白歸苑殷」集成4331: 西周中期)・「𧈩」(「師遽方彝」集成9837: 西周中期)・「𧈩」(集成10208(春秋早期)とをとりあげ、それぞれの文字が一切混用されることがなかったとする。また、甲骨文では「𧈩」(合10063: 歷組)・「𧈩」(合32509: 賓組)などのように書かれる字をとりあげ、古くはこれらが「蠶」と解釋されていたが、張政烺(「釋它示——論卜辭中沒有蠶神」『古文字研究』第一輯所収)が「它」と解釋を改めたことを「十分正確(とても正しい)」と高く評価する。

そして裘氏は、甲骨文と金文の「它」字には一つの共通の特徴があり、それは身體の象形から字形を起す作業が比較的粗雑な点であると指摘する。金文の「它」字は字形の中段を縦線が貫く形で書かれるが、それは甲骨文の「它」字が描画する蛇の鱗紋を簡略化したものとする(この縦線を省略する字形については、縦線が存在するものに比して晩期のものとする)。甲骨文の「𧈩」(合23110)・「𧈩」(合19622: 賓組)は變じて金文の「虫」となり、「𧈩」は變じて金文の「它」となったのであり、その系統が二つに分かれているのは明白であると結論づける。それを根據にして、裘氏は羅氏の「元々它と虫は同一字であって、後世に誤って二つに分かれた」とする説を「信ずるべきではない」と一刀兩断する。

このような議論の結果、裘氏は「𧈩」字と「它」字が無関係であること確認し、當該字の下半分の字形を「虫」と隸定した。上部の「止(足)」の隸定についての異説はなく、裘氏はそれらの總結として、當該字を「𧈩」と隸定するという新説を立てたのである。

では裘氏は「𧈧」をどのような義であると解釋するのか。これに対し、「傷害」の義であり「害」の本字ではないかとするのが、次の部分の中心となる。

まず裘氏は、その証明のための道筋として「𧈧」字を採りあげることから議論を始める。

初めに、『説文解字』（卷五下・外部）「𧈧・車軸耑鍵也。兩穿相背。從舛、𧈧省聲。」を挙げる。

裘氏はこの字の大徐本小篆字形「𧈧」に対し、小徐本（徐鍇『説文解字繫傳』）並びに同『説文解字篆韻譜』の小篆字形「𧈧」を対照して、中央部を禹形に作る「𧈧」字に隸定し、加えて「𧈧」と字形（すなわち聲符となる）を共有する「𧈧」・「𧈧」についても、『四部叢刊』本ではみな「𧈧」ではなく「𧈧」形になっていると指摘する。

裘氏は、上部を横倒しの止「五」と「禹」とに従う字「𧈧（𧈧）（日書甲28）」等が、また異體字として「禹」の下に「𧈧」が付く「𧈧（𧈧）（日書乙50）」等がそれぞれ睡虎地11号墓秦簡に見えることを指摘する。氏は、当該の竹簡に見える用語について、これらは早期の建徐家（提要著者注・術數家のことか）の使用した用語であることを指摘する。

そして、同様の形式・内容の他簡で、これらの字が「害」と書かれていることから、「𧈧（𧈧）」は「害」の意味で使われているとしたのである。

ここで論は、再び「𧈧（𧈧）」字の話に戻る。

まず裘氏は、『説文解字』の「𧈧」の本義を「車軸耑鍵」とする説を取り上げ（後文でこの説を否定する）、『毛詩』小雅／車𧈧篇が、『左

傳』昭公二十五年条では「車𧈧」と書かれることを例に挙げ、「𧈧（𧈧）」と「𧈧」が傳世文獻で通用されていたこと、及び「𧈧」を聲符とすることを指摘する。またそれに加えて、「𧈧」を聲符として持つ「𧈧」について、『説文解字』（卷二下）に「𧈧・讀若害」とあることも指摘する。そして讀者が「害」となることを根據にして、「𧈧（𧈧）」と「𧈧（𧈧）」とが同一時の異體字關係にあるとした。

次に「𧈧」を共有する文字の話となる。

まず氏は、江陵天星觀1号楚墓出土竹簡に「車」に従う「𧈧（𧈧）」字が存在することを挙げ、当該字が「𧈧」の古い書き方とみるべきであり、「𧈧」は「𧈧」の變體であるとする。「𧈧」については、この兩方の書かれ方が擦り合わされ一つとなったものであり、「𧈧」字は最後發の譌體、そして楚簡の「𧈧」は「𧈧」の異體字であるとする。また別に秦簡に「害」を「𧈧」に作る例を挙げ、この字は『説文解字』の「𧈧」と同一字ではないかと指摘する。

更に、馬王堆三号漢墓帛書『周易』に「𧈧」と書かれ、現行本で「𧈧」と「害」との二通りに隸定が分かれる文字についても取り上げ、「𧈧」は「𧈧」の變體であり、「𧈧」が近似の音であるから通用されたとする（『説文解字』で「𧈧」を共有する「𧈧」が「讀若害」であり、同様に「𧈧」が「讀若𧈧」とあるのを例とする）（提要著者注・郭店楚簡『孔子詩論』では、『詩』國風／周南／葛覃、及び王風／采葛の「𧈧」を「𧈧」「𧈧」のように「+」＋「𧈧」形に作る）。

ここまでは、「𧈧」を共有する文字が「害」の義・音であることを確認する議論である。これらを背景に、本論冒頭で取り上げた甲骨文

字について議論を進める。

まず裘氏は、甲骨文の「𧈧」と隸定される文字は「萬」の初文であるとする。そして容庚の指摘する甲骨文から小篆への「萬」字の字形變遷を例に挙げて、「𧈧」字が變遷して「萬」となったのも同類であるとする（その他、本来「虫」形であったものが「禹」に為った事例をいくつか挙げる）。

そして「禹(于母)」と「害(匣母)」が何れも喻母三等であることを根據に、兩字の音が近いことを指摘する一方、「禹(魚部)・「害(祭部)」と韻が遠いことも併せて指摘する。ただし裘氏は、古文字の實例を根據として、「害」の古音が魚部と密接な關係にあったとし、そのため「萬」の「虫」が變化して「禹」となったのも、これが理由であるとするのである。

次の一段が本論の根幹となる部分である。

まず、『說文解字』が「傷」を「害」

𧈧 字形演變

首頁 簡介 收錄現況 凡例 出處表 使用說明 參考書目 聯絡信箱




簡易查詢 | 進階查詢

字號

字形

◀ 9684 (又8775) 萬

共搜尋到11字・字形大小: 點

| | | | | |
|--|--|---|--|--|
|  前3.30.5(甲) |  萬卣(金) 商代晚期 |  萬卣(金) 商代晚期 |  萬卣(金) 商代晚期 |  萬戈(金) 商代晚期 |
|  史宜父鼎(金) 西周晚期 |  令狐君嗣子壺(金) 戰國早期 |  陳侯因齊敦(金) 戰國中期 |  帛甲2.28(楚) |  說文・內部 |
|  睡·效27(秦) | | | | |

(點選字形可取得字形編輯資訊)

圖1：中央研究院小學堂字形演變「萬」より

(<http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/yanbian?kaiOrder=3162> 2019年2月27日閲覧)

𧈧 字形演變

首頁 簡介 收錄現況 凡例 出處表 使用說明 參考書目 聯絡信箱

簡易查詢 | 進階查詢

字號

字形

◀ 3362 牽(虫・犮)

共搜尋到14字・字形大小: 點

| | | | | |
|--|---|---|---|---|
|  乙8896(甲) |  甲1654(甲) |  前1.47.3(甲) |  鐵103.1(甲) |  佚11(甲) |
|  粹11(甲) |  寧滬1.480(甲) |  甲181(甲) |  前2.28.1(甲) |  冊禮卣(金) 商代晚期 |
|  郭·尊.26(楚) |  郭·五.35(楚) |  上(1).孔.16(楚) |  說文・外部 | |

(點選字形可取得字形編輯資訊)

圖2：中央研究院小學堂字形演變「牽」より

(<http://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/yanbian?kaiOrder=63136> 2019年2月27日閲覧)

の本義とするという説を挙げ、裘氏はこれに対し、周法高の「害」は元々下部が器形、上部が蓋の形をそれぞれ象つたものであり、「會」・「蓋」等の音義と近いのではないかとする説に賛同する。そして『説文解字』が、「害」の假借義である「傷」を本義と誤認したのだと述べる。そして「虫（𧈧）」字に「害」音があり、その字形も人の足を爬蟲類が咬むという事象を象つたものであり、これもまた「傷害」の義と合致するため、まさしく「虫（𧈧）」字こそ傷害の「害」の本字であると結論づける。そして後世の用字習慣で、假借字の「害」を傷害の意味を表すために使用するようになり、「𧈧」の使用が廃れていったのではないかとする。

甲骨卜辭に「虫」字を動詞・名詞の二通りの用法があるとし、意味は雙方とも「害（祟）」字と近く、「害」の意味として使用されて十分適合的であるとする。また、上述の羅振玉説を引き、羅氏が古代の成語とする「無它」について、動詞として「它」を使用する用法が傳世文獻に見えないことを指摘する。一方で裘氏は、「虫」を「害」の意味で使用する用法に着目し、「它」を「虫」の誤釋であるとすれば全て合理的に解決されるとし、『詩』邶風／泉水・二子乗舟に「有害」の語があることを指摘し、更に『書』金縢に卜筮關連の語として「罔害」の語があり、それはまさしく甲骨文の「亡虫（害）」のことでありとする。

次いで甲骨卜辭中「虫」の用法を挙げ、「虫」が「虫」になっている事例を紹介する。ただし裘氏は、「虫」は誤字ではなく、音の近似による借用ではないかとする。上古の時代爬蟲類の咬害の被害は甚大

であり、それを理由として「虫」から派生した字が作られたのであるとし、「虫」を「𧈧」の意味で使用する用法はまったく不自然ではないと指摘する。

また別に、甲骨卜辭で「虫」を「𧈧」に従う字で書かれる例を挙げ、この字は殷代の金文にも見られ、西周にも當該字の派生した字形が見られることを指摘する。この字が生まれた背景として、人が蟲や爬蟲類の咬害に遭うのは、大抵が道を歩くときであり、「𧈧」字は「虫」の繁體であるとする先人の説が妥當ではないかとする。そしてこの字は小篆の「𧈧」の初文である可能性を指摘する。

最後に、金文に見えるいくつかの「虫」から派生した字形を共有する字の解釋について事例を挙げて結びとする。

提要者コメント…當該字については『説文解字』に従った「𧈧」の項目に収録されることが一般的だが（李學金編『字源』・李圃主編『古文字詁林』中央研究院「小學堂」等）、『字源』や「小學堂」のように、「虫」を原義或いは別字形として扱い、また字義と字形變遷の解説も本論に従って書かれるなど、裘説は現在有力なものと思なされている。

（山田崇仁）

「釋殷墟卜辭中的“卒”和“禕”」

初出は『中原文物』一九九〇年第三期。甲骨文において従来「衣」と釋されてきた字は、祭祀卜辭では「殷祭」の「殷」と釋讀され、あるいは田獵卜辭では地名の用例では「殷」、「衣逐」の用例では「衣」字を「殷」と釋して「合」の意とするなど、「殷」字として釋讀され

てきたが、辭義の面で疑問が生じ、新たな釋讀が求められるようになったと問題提起する。ついで唐蘭「伯或三器銘文的釋文和考釋」(『文物』一九七六年第六期)注一〇に見える「衣」字を「卒」と釋し、「完畢」の意とする説を紹介し、李學勤がこの説に同意し、甲骨文の「衣逐」を「卒逐」と釋すべきであるとしたのは、極めて啓發性に富む意見であるという(李學勤は「卒」字に關して「多友鼎的“卒”字及其他」(『新出青銅器研究(增訂版)』、人民美術出版社、二〇一六年。初版一九九〇年)を發表している)。こうした指摘をふまえ、裘氏は甲骨文中の「衣」字は、一部の辭義が不明な文例を除き、「卒」と釋讀すべきであると考えようになったこと、これと前後して李學勤も同じ意見に至ったことを述べる。そして甲骨文中には更に「衣」に従い「聿」に従う「裨」字があるが、これは後に論じるように「卒」の異體であるとする(以下、各字形については末尾の「參考圖版」を參照)。

この論文は以下、甲骨文中の「卒」「裨」字の字形と用例の二つの方向から分析する。字形に關しては、まず最初に寫法が古文字一般の「衣」字と合うものを「衣a」とし、下部の末端に鈎のような「尾」があるものを「衣b」と設定する。そして後者の字形は、更に「尾」が下に垂れているものや斜めに出ているもの、平出しているもの(鈎になつていないもの)も含まれるとする。金文など古文字中には別に「卒」字が存在するが、これは「衣b」から變化していったものであると位置づける。以下は甲骨文中の字形についての話となる。「衣」の形の中に交叉綫を加える「卒」字は自組のほか主に賓組卜辭に見えるが、武丁の後の卜辭には見えなくなり、「衣b」が多く用いられるよ

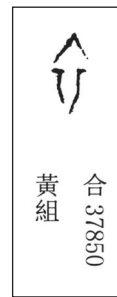
うになる。黃組卜辭には「衣a」の字形のみが存在し、「衣b」が見られないが、その用法は他組の「衣b」と同様であり、やはり「卒」と釋される。この「衣a」の字形で「衣b」を表す現象は、金文で「衣」字で「卒」を表す由來となるもので、周原甲骨(H一・三)にもその辭例が確認されるとする。こうした議論をふまえ、「衣b」は最初は「衣」字の異體であつたのが、後に「卒」を表す専用の字形になった可能性を排除できないとする。一方の「裨」字については、その用法が「衣b」と類似しており、その示すところは同一の詞であり、「裨」は「卒」字の異體であるとする。その聲の「聿」と「卒」とは、上古音ではともに物部に屬し、「聿」は以母で「卒」は精母だが、以母の字が精母の字と諧するのは、古代に多くその例があるとし、兩聲が音通することを示す。

ついで辭例の分析に移る。ここでは「衣b」と「裨」の辭例を主な分析對象とする。たとえば「于魯衣b、𠄎𠄎」【魯衣bはるに于び、𠄎に𠄎ばんか】(魯祭が終わつた後に多祭を開始する)のような例と、「于多裨夷饗先」【多裨はるに于び夷れ饗を先にせんか】、「夷衣a翌日歩」【夷れ翌日を衣aへて歩す】などの例を比較し、「衣b」と「裨」、あるいは「衣a」が同様の辭例の中で同じ用法で使われていることを確認したり、「于翌日裨廼率又大乙」【翌日裨はるに于び廼率りて大乙に又す】、「王衣b祀廼出」【王、祀を衣bへるに廼ち出でんか】のような辭例を、傳世文獻の『禮記』曲禮上に見える「卒哭乃諱」【哭を卒へて乃ち諱す】と比較するといった具合に、様々なシチュエーションで用いられる「衣b」「衣a」「裨」を「卒」と釋して問題がないか

どうかを驗證していく。そのほかにも「尢衣b」のように驗辭中に用いられる例、「卒至于多毓」「卒茲月」「卒日」「卒入」などの用法について驗證しているが、冒頭で話題にした「卒逐」については、黄組田獵卜辭には「衣a逐」が常見し、「卒逐、亡災」のような辭例は、「逐獸」のことが完成し、災害がない「逐獸のことが終われば災害があるはずがない」の意であること、ほかに「逐」字を脱する例や、何組卜辭の「衣b豕亡災」などのバリエーションが存在することなどを指摘している。

最後に西周金文中の「卒」と釋讀すべき「衣」字について述べる。大豊簋(集成2822)には「王衣祀于王丕顯考文王、事喜上帝」「丕顯王作胄、丕緝王作庸、丕克訖(?)衣王祀」と、二箇所で「衣」字が見えるが、これらはともに「卒」と釋讀すべきであり、「王衣(卒)祀于王丕顯考文王」は「王が文王に對する祭祀を終えた」、「丕克訖(?)衣(卒)王祀」は「大いに克く王の祭祀を終えた」の意であるとする。更に末尾に「補記」を加え、「初」字は「衣」に従い、「刀」に従う會意の字ではないか、衣服を縫製する過程の中で、布の裁斷が最初の工程となり、「卒」字の本義と對になるのではないかという推測を提示する。そして「卒」の本義は「士卒」ではなく「終卒」の意であり、「衣」に交叉綫を加える形は、おそらく交叉綫を通すことが衣服の縫製が完了したことを示すとす。下部が上にはねた鉤型の「尾」になっている「卒」は、もし本来「衣」字の異體でなかったならば、その字形はおそらく衣服が既に縫製し終えて折り畳みができるという意味を示しているとする。

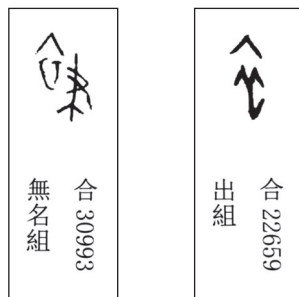
參考圖版



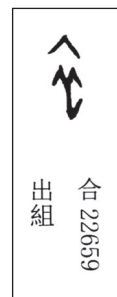
①衣 a



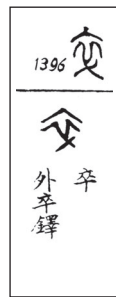
③交叉綫のある卒



④裪



②衣 b



⑤小篆と金文の卒

「從殷墟卜辭的“王占曰”說到上古漢語的宵談對轉」

(佐藤信弥)

附論一 說“𠄎”

附論二 釋甲骨文的“𠄎”字

原載は『中國語文』二〇〇二年一期。附した二編はそれに先立つ小論であり、文中に引かれる。それぞれの原載は、『古文字論集』(中華書局、一九九二年)と、『第三屆國際中國古文字學研討會論文集』(香

①～④は『新甲骨文編(增訂本)』、四九九～五〇一頁、
⑤『金文編(第四版)』、五八七頁より。

港中文大學中文系、一九九七年)である。

これらの論文は、「囿」類の字形を「占」〈兆〉〈絲〉〈憂〉等の語に解釋するのは、「宵談對轉」で説明できるとする。對轉とは、韻尾の交替により、派生語やいわゆる同族語が形成されることをいう。補足した表①「上古音韻母表」を参照されたい。表の三段目にある宵部に對應する陽聲韻部が存在せず、また最下段の「*₃」韻尾の侵部・談部に對應する陰聲韻部も空欄である。上古音早期においてこの宵部と談部とが對轉するというのが、宵談對轉説である。

以下「」内は筆者の補注である。

裘氏はまず、甲骨文の占辭「吉凶判断を記した部分・絲辭ともいう」に類見する「王占曰」の類の「占」にあたる字は、貞人グループごとに字形が異なり、「囿・囿・囿・囿」等となっているが、同一の語を表し、「占」と釋するのが正しいことをいう。

次に、この字が別の文脈では、「絲・憂」とも釋せることをいう。自身の先行論文、「說「囿」(附論一)」において、「囿」を「絲」と釋讀し、同時に「有囿」「亡囿」の「囿」を「憂」と釋讀したことを述べる。

續いて、周原甲骨文の「𠄎」字についての考釋(附論二)を引き、「絲」と「兆」の關係を述べる。つまりその發端の辭「𠄎」の「𠄎」字は、「𠄎」の異體字と看做すべきであり、「𠄎」は占辭である。さらに、『屯南』2688號卜骨上の二つの「𠄎」字は、「兆」の表意の初文であり、「𠄎」は「𠄎」とともにその後起の形聲字であり、「兆」字が金石篆文中では「𠄎」(川の兩側に足形)と書かれ、決して卜兆のような形ではない

表①「上古音韻母表」 郭錫良『漢字古音手冊(增訂本)』(例言 p.5)による 王力『漢語史稿』(p.61~63)に基づく

| 陰 | | 入 | | 陽 | |
|----|---------|----|-----------|----|----------|
| 1 | 之部 a | 2 | 職部 ək | 3 | 蒸部 əŋ |
| 4 | 幽部 əu | 5 | 覺部(沃) əuk | 6 | 冬部(中) əm |
| 7 | 宵部 au | 8 | 藥部 auk | | |
| 9 | 侯部 o | 10 | 屋部 ok | 11 | 東部 oŋ |
| 12 | 魚部 a | 13 | 鐸部 ak | 14 | 陽部 aŋ |
| 15 | 支部(佳) e | 16 | 錫部 ek | 17 | 耕部 eŋ |
| 18 | 脂部 ei | 19 | 質部 et | 20 | 眞部 en |
| 21 | 微部 əi | 22 | 物部(術) ət | 23 | 文部(諱) ən |
| 24 | 歌部 a | 25 | 月部(祭月) at | 26 | 元部 an |
| | | 27 | 緝部 əp | 28 | 侵部 əm |
| | | 29 | 葉部(盍) ap | 30 | 談部 am |

*上段に「陰入陽」を追加。丸括弧に他者の別稱を補った。王力『漢語史稿』は29部で、6冬部がない。ここでは6冬部を28侵部から分立させるが、擬音は同じ [əm]、後に [əuŋ] に變化した。

ので、卜兆の「兆」に用いるのは、假借であろうという。また、「囿」が「囿」(兆)と「口」に从っており、「占」字が「卜」と「口」に从うのと、同意であり、絲辭の「絲」の本字であろうと述べる。上古音で「絲」は幽部、「兆」は宵部に屬し、この二部は音が近く、幽部と宵部が通假する例は多いので、殷墟卜辭で時に「囿」(兆)を「囿」(絲)とするのは、音理において決して不合理ではなく、「囿」(絲)はおそらく「囿」(兆)から派生した語であろう、と結論づけている。

以上をうけて、「占」(談部)と「繇」(幽部。宵部と通じる)・「兆」(宵部)が通じることには「宵談對轉說」で説明できるとして以下の論を進めている。なお、「王固曰」の「固」は動詞であり、占卜と關係する「繇」字は古書の中では名詞であることを補足している。

そこでまず、「兆」(定母宵部)と「占」(章母談部)の音が近いことを論じている。中古音では、ともに開口三等字。上古音の章母と端母、および端母と定母の關係は密切である。宵談對轉說により、「兆」と「占」は聲母が近く、韻母にも陰陽對轉關係がある字である。「占」の意味は、兆象を根據にして吉凶に對して判斷すること、それは「兆」から派生した語のほずである。次に、「囧」(兆)と相い通じる「囧・囧」字は、「口に从い囧(兆)に从い、囧亦た聲」と分析でき、この字を「占」と釋したのは全く理に適っており、前人の釋讀は決して誤ってはいないとする。また占辭の意味の「繇」は、「兆」・「占」と同族詞であるが、「王固曰」の「固」は、「繇」と釋するよりも、「占」と釋する方が確かに理に適しているという。

そして、一般に宵談對轉は『詩經』時代より前の語音現象と看做されているが、各家が擧げるその例證は、明らかに『詩經』時代より早いものはないので、殷墟卜辭に反映されたこの「兆占對轉」の現象は重要な意義を持つとする。

次に、宵談對轉說の第二例として、ある「兆」(定母宵部)聲に从う字の中に「涉」(禪母葉部=談部入聲)に从う書き方があることを擧げる。

西周金文中に女性に用いられる形聲字「媯_シ等」があり、形旁が「女」

で、聲旁は一條の曲線を主幹とし、兩邊にそれぞれ「止」形の字があつて、書き方は〈散氏盤〉の「涉」(焮)字の右旁と同じである。甲骨文の「涉」(媯_シ)字は二つの「止」がそれぞれ「水」の兩邊にある形で、「水」形は多くが簡化されて一條の曲線となっている。先に擧げた女性とする字「媯_シ等」は、もと「姚」と釋されたが、『金文編』の新版では根據なしとして未識字としている。しかし發見された戰國楚簡帛文字の中で、長沙帛書と包山簡の「逃」(焮)字、および郭店『老子』簡の甲組中で「兆」に借された「莖」(莖)字と、「盜」に借された「規」(莖)字は、その聲旁の書き方がともに上に擧げた金文の「女」に从う字「媯_シ等」の聲旁と合致している。これによりこの字を「姚」と釋したのは正しいことが分かる。

その根據として、「兆」(定母宵部)と「涉」(禪母葉部=談部入聲)の古音が近いことをいう。中古音では、二者ともに開口三等字。禪母の上古音と定母は極めて近く「ともに舌音。表②「上古音聲母表」参照」、宵談對轉說に従い、韻母にも陰入對轉關係がある字であり、それ故に二者は聲旁により通用することができると述べる。

三例目として、「盜」(定母宵部)字が、古書の中で「織」(心母談部)と通じる例を擧げる。周の穆王八駿中の「盜驪」(『穆天子傳』卷四・「列子」周穆王)を、『荀子』性惡では「織離」と稱しており、楊倞は「織離即ち『列子』の盜驪也」と注している。心母と定母とが形聲字の中で相い諧する例として、「肖」(心母)と「趙」(定母)、「犀・犀」(心母)と「墀(墀)・遲(遲)・柅(柅)」(定母)を擧げる。「盜」と「織」は宵談對轉の關係であり、楚簡で「涉」聲に从う字を假借して「盜」

表②「上古音聲母表」 郭錫良『漢字古音手冊』(增訂本)例言(p.4)による
王力『漢語史稿』による32声母とその擬音に基づく

| | | | | | | |
|-------|--------------------|----------------------------------|-----------------------------------|--------------------|--------------------|-----|
| 喉音 | 見 k | 溪 k ^h | 群 g ^h | 疑 ŋ | | |
| (+牙音) | 曉 x | 匣 ɣ ⁺ 喻 ³ | 影 ɔ | | | |
| 舌頭音 | 端 t | 透 t ^h | 餘 d→ɾ=喻 ⁴ | 定 d ^h | 泥 n | 來 l |
| 舌上音 | 章 t=照 ³ | 昌 t ^h =穿 ³ | 船 d ^h =牀 ³ | 書 ɕ=審 ³ | 禪 z=禪 ³ | 日 n |
| 齒頭音 | 精 ts | 清 ts ^h | 從 dz ^h | 心 s | 邪 z | |
| 正齒音 | 莊 ʈ=照 ² | 初 ʈ ^h =穿 ² | 崇 ɖʒ ^h =牀 ² | 山 ʃ=審 ² | | |
| 唇音 | 幫 p | 滂 p ^h | 並 b ^h | 明 m | | |

*擬音は、現在の國際音聲記號に置き換えた。餘母は [d] から [ɾ] に變化したと王力はいう。
この餘母を [d] としたため、他の濁音聲母を有氣音 [ʰ] としたが、後に撤回。

とすることの證據になるといふ。

一般に『詩經』時代より前の現象と看做されているこの宵談對轉が楚簡に見えるのは、戰國時代の楚において形聲字の舊字形を沿用して

いただけなのか、それとも談部と對應する陰聲字が後の宵部字となる變化が、當時の楚方言中ではなお未完成であったのかは未詳であると述べる。

宵談對轉説の次に、「説「𠄎」(附論一)」で述べた殷墟卜辭中の「有𠄎」「無𠄎」の「𠄎」を「憂」と讀むことについて論じている。

「𠄎」は卜兆の「兆」(定母宵部)の本字とし、「憂」(影母幽部)の字である。中古音では、二者ともに開口三等字、宵部と幽部は音が近い鄰部であり、關係は極めて密切であり、このことは周原卜辭「𠄎」字に關する文(附論二)中ですでに言及した。さらに「兆」聲に从う字の幽部字と通ずる例として、『古字通假會典』の、「𠄎」が「𠄎」に通じ、「窕」が「悠」に通じる例を挙げる。

續いて、影母と定母の距離について論じて、まず「影定諧聲」の例として、定母の「佶」(直立切)が影母の「邑」を聲旁としていることをいう。さらに出土文字資料から見て、「憂」字が「舌齒音」字とかなり密接な關係があることをいう。

今本『周易』否卦六三爻辭の「包羞」の「羞」(心母)を、馬王堆帛書本は「憂」に作る。「憂」の本字は「愬」であり、楚簡中の「愬」字には數種の書き方があって、「愬」と隸定される字形についての李運富による以下の指摘を引用している。

「愬」は實は「𠄎」に从うものであり、「𠄎」は本は簞席の形を象る、「𠄎」は「宿」の異體字(字中の「百」は「𠄎」の隸變)であり、「宿」は幽部入聲と幽部との兩讀で、「憂」と同部である。さらに、古文字中の「首」と「頁」しばしば分れず、音義が分化したのは後の事であ

る。「首」もまた幽部の字であり、「𠄎」が从う「頁」(首)もまた聲旁であろう。

この意見は道理があるとして、「宿」は心母の字、「首」は書母の字である〔表②「上古音聲母表」を参照〕ことを付け加え、「𠄎」は韻書に、「他念」「他點」の二切があり、透母侵部の字であり、侵部と「𠄎」が属する幽部は對轉關係があることをいう。故に、唐蘭が「𠄎」は實は「𠄎」(定母侵部)の初文であると看做しているのは信じられると補足する。

最後に、「𠄎」(憂)字の異文と諧聲情況から見て、定母字の「𠄎」(兆)を「憂」と讀むのは可能であろうが、しかし「𠄎」を「憂」と讀むのは、やはり確かな證據が缺けていて、「有𠄎」「亡𠄎」などの卜辭中の「𠄎」が畢竟どんな字に讀むべきかは、やはり引き続き深く研究しなければならぬ、と結んでいる。

(村上幸造)

「甲骨文中の見與視」

標題論文は、それまで同一視されていた甲骨文の「見」と「視」について、前者が「見」、後者が「視」として區別して用いられていたことを、戰國楚文字(郭店楚簡)より立證したものである。その初出は一九九九年の『甲骨文發現一百周年學術研討會論文集』(文史哲出版社)であり、その後、二〇〇八年に復旦大學出土文獻與古文字研究中心網站 (<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/432>) にて訂補版が公開された。

殷墟甲骨文中に見える、「目」の下に跪坐している人形を添えた「𠄎」字と、「目」の下に直立している人形を添えた「𠄎」字は、『甲骨文編』(一九三四年)の例に見られるように、従前は共に「見」と解釋されてきた。一九八〇年代になって張桂光氏が、初めて二者はそれぞれ異なる字であることを論じ、「𠄎」が「見」、「𠄎」は「𠄎」の異文で「望(𠄎)」と釋するのが妥當だとの見解を示した(『古文字考釋四則』『華南師院學報(社會科學)』一九八二年第四期)。裘錫圭氏は「𠄎」「𠄎」を區別した點には贊意を示す一方で、「𠄎」を「望(𠄎)」と釋した點は成立しがたいと批判する。では、「𠄎」は一體いかなる字なのだろうか。裘氏は、一九九九年當時新出の郭店楚簡がその重要な手掛かりを與えてくれるという。

郭店楚簡の整理者は、竹簡本『老子』を考釋した際に、上部が「目」に従い下部が立人となっている「𠄎」が「視」字に相當すること、簡文の「𠄎」が「見」字に相當し、兩者が使い分けられていることに氣づいた(『郭店楚墓竹簡』文物出版社、一九九八年、一一四頁)。たとえば、今本『老子』第三十五章に當たる「視之不足見(之を視るも見るに足らず)」を、竹簡本は次のように作る。

𠄎之不足𠄎(郭店楚簡『老子』丙本五號簡)

「見(𠄎)」のこの種の寫法は楚文字によく見られるものの、「視(𠄎)」の方はこれまであまり見られず、包山楚簡において「𠄎日」という官名が見えるくらいであった。この「𠄎日」も従来は「見日」と釋され

ていたが、裘氏は郭店楚簡によって「視日」と釋すべきことを主張し、その傍證として『史記』陳涉世家の「周文、陳之賢人也。嘗爲項燕軍視日（周文は陳の賢人なり。嘗て項燕軍の視日と爲る）」を例示する。かくして裘錫圭氏は、郭店楚簡の立人に従う「𠄎」字を一貫して、甲骨文の「𠄎」字を「視」と釋し、のちの形聲字「視」の表意初文であると提起した。

次いで裘氏は、「視」の表意初文の用字について、甲骨文・西周金文・戰國文字と時系列に追っていく。

貞、賢人五千、乎（呼）視百方。（合集 06167）

貞、乎視𠄎、𠄎。（合集 06193）

丁未卜、貞、令立視方。一月。（合集 06742）

……視方于𠄎（𠄎）。（合集 06747）

貞、乎登視戎。（合集 07384）

勿乎視戎。（合集 07745）

まず卜辭については、右に列挙した「視」字が、『左傳』に出てくる「視師」（僖公十五年・哀公二十三年）の「視」と意味が近く、戦鬪前の敵情視察の意であることを確認する。ただ、卜辭の「視出自（師）」（合集 17055・合集 05805）における「出自」は敵対勢力ではない。これについては『尚書』文侯之命の「視爾師（爾の師を視よ）」の「視」と意味が近いという。

西周金文になると、早くも「見」に従い、「氏」聲の「𠄎（視）」字

が出現するが（筆者注：𠄎尊「𠄎」や員方鼎「𠄎」か）、「視」の表意初文は依然として常用される。

方繼亡不𠄎視。（牆盤・集成 10175）

王命益公征眉敖。益公至告、二月眉敖至視、獻賁（𠄎伯簋・集成 04331）

眉敖者虜卓吏（使）視于王、王大衛。（九年衛鼎・集成 02831）

畏孳迺遣間來逆邵王、南夷・東夷具視廿又六邦。（鞅鐘・集成 00260）

南仲邦父命駒父簋南諸侯、率高父視南淮夷、厥取厥服、葦夷俗、豕（？）不敢不敬（？）畏王命、逆視我、厥獻厥服。（駒父盨蓋・集成 04464）

右の西周金文における「視」字について裘氏は、みな周王朝と蠻夷の邦との關係に絡むとし、『周禮』春官・大宗伯の「時聘曰問、殷覲曰視（時聘を問と曰い、殷覲を視と曰う）」でいうところの「視」、すなわち天子を聘問する意に近いとする。駒父盨蓋銘の「駒父視南淮夷」と「南淮夷」逆視我」については、下位者が上位者を聘問する場合も、上位者が下位者を訪問する場合も共に「覲」（＝「視」）とすることができるとする段玉裁説（『說文』八下・見部・覲）を引いて説明している。このほか、二〇〇八年の追記に、匱侯旨鼎の「匱侯旨初見事于宗周、王賞旨貝十朋、用作𠄎寶尊彝」（集成 02628）、玠方鼎の「玠見事于彭、車叔賞玠馬、用作父庚彝」（集成 02613）、『尚書』康誥の「見

士于周」(裘氏は楊樹達「書康誥見士于周解」(『積微居小學述林』所收)における「士」を「事」と讀む説を支持)を引き、これらにみえる「見事」「見士」はいずれも「視事」と釋すべきであるとす。「視事」は、『左傳』襄公二十五年「崔子稱疾不視事(崔子(杼)疾と稱して視事せず)」に見えるように「古代常用語」であるという。(なお、瓊方鼎の「視事」については、フランス人神父雷煥章 (Jean Almiré Robert Lefevre) の示教を受けたとの謝辭が附記されている。)

春秋戰國間の侯馬盟書になると、「見」と共に「睨」字が見え、晉國ではもはや「視」の表意初文は用いられなくなってしまったらしい。また郭店楚簡と時期的に近い戰國中期後半の中山王響墓出土兆域圖には「目」に従い「氏」聲の「𠄎」字が見えるほか、中山王響方壺(集成 09733)には立人に従う「𠄎」が「見」の用法で使われていて(則臣不忍見■)、その混用が示唆される。前述の郭店楚簡・包山楚簡の例から、楚國においては「視」の表意初文が比較的遅くまで使用されていたことが分かる一方で、その郭店楚簡ですら立人に従う「視」字の用例は少数に止まり、楚國においてもその地位はすでに搖らぎはじめていたことが窺われると裘氏は結ぶ。

(秋山陽一郎)

